

## 令和時代を生き抜く

小城高等学校長 永田 彰浩

新天皇が即位し、いよいよ本格的に「令和」時代が動き出した。「<sup>まなびや</sup>学舎にひびかふ子らの弾む声さやけくあれとひたすら望む」この歌は、令和初の歌会始において、「望」という題で天皇陛下がお詠みになった歌です。この一句には、子どもたちの将来が明るくあって欲しいと願う切なる思いが詠み込まれています。「令和」とは令（うるわ）しく平和を築いていくという合言葉であり、この元号には、一人ひとりの日本人が明日への希望を抱き大きな花を咲かせて欲しいという願いが込められています。

令和になって十ヶ月余が過ぎましたが、私たちの暮らしは好転しているのでしょうか。平成時代は、いろいろなものが激しく移り変わる「変化の時代」、世の中がどう変わっていくかが不透明で先の見通せない「よくわからない時代」とも呼ばれていました。そして令和時代は、変化のスピードが速すぎて人々が戸惑うことの多い「混迷の時代」、物は豊富にあるが幸せであるという実感が得にくい「幸せになれない時代」とも呼ばれています。

最近の国際情勢を見ると、世界中で分断と格差が深まっているように思えます。中村哲医師のアフガンでの銃撃死、アメリカによるイランのソレイマニ将軍殺害、イランによるウクライナ機誤爆、香港の民主化デモ、英国のEU離脱、北朝鮮の軍拡、ドイツの移民・難民受け入れ反対等、「令和」本来の意味である幸せからは程遠く、むしろ遠ざかっているようにも見えます。

また、現在は、幕末・維新以来の大教育改革である「高大接続改革」が待ったなしで進められていますが、ここにきて改革の目玉の一つでもあった大学入学共通テストへの英語民間検定試験や、国語と英語の記述式問題の導入が相次いで見送られる等、改革は足踏み状態です。このような教育界の混乱にも見て取れるように、現代社会は激しく変化し、先行き不透明で混沌とした状況です。

世の中はこれからどのように変わっていくのでしょうか。Society5.0の実現、SDGs、シンギュラリティ、グローバル経済と国際競争力の激化、少子高齢・人口減社会の到来、被災地の復興等、多く問題が平成から令和へ先送りされています。これらの問題は明

快な解答が見出せない深刻な問題です。これらの解決すべき課題に対して、私たちは、今後に難しい対応を迫られることとなります。

現代社会を生き抜くキーワードは「変化」です。「平成」から「令和」への改元を機に、各界より、良好な社会の実現を期待する声が一斉に上がりました。とりわけ時代を創る新しい力が育つこと、及びその力を結集してイノベーションを起こすことに大きな関心が集まっています。「閣僚自らが制度だけではなく、空気を変える」（環境大臣：小泉進次郎）、「旧来の日本の良さとか日本的なやり方にこだわらず、どうすれば最も最も能力を発揮できるのかを柔軟に考えていく」（一橋大学：青島矢一）、「人やモノ、技術やお金といった資源を、どうやって革新的で推進力を伴ったアイデアと結合するか」（政策研究大学院大：大田弘子）、「日本社会の特徴に同質性があるが、イノベーションは異質なもののぶつかり合いでしか起きない」（経済同友会：桜田謙悟）

今年は、2020東京五輪・パラリンピックが開催されます。スポーツ界では、膨大なデータや科学的なデータに基づいた練習を取り入れたり、桜の勇者（ラグビー日本代表）のように、メンバーの約半数が海外出身・外国籍という多様性を導入する等、これまでのやりかたに縛られない新しいスタイルに変えることで大きな成果をあげています。「空気を読む」という言葉がありますが、昔から日本社会は「空気」によって支配されてきたと言われていました。しかしながら、激動の時代にあっては、「空気」を読んで「変えない」「変わらない」という選択肢はあり得ません。むしろ「空気を変える」「風を起こす」という言葉のように、変化を求めて積極的にイノベーションを起こすことが令和時代を生き抜く術であると信じています。

卒業文集『黄城』学校長巻頭言より